

## 石川啄木における〈安楽〉

関谷 博

はじめに

「憧憬」は明治三十年前後に高山樗牛と姉崎嘲風によって、「幻滅」は明治三十九年に長谷川天溪によって、それぞれ相次いで作られた、歴史の新しい和製漢語である。<sup>1)</sup>そしてその後みごとに、このふたつの語は日本語として定着し現在に至っている。そのこの意味からまずは簡単に触れておこう。

このふたつの語を支えた、明治三十年代から現在にまで共通する社会的条件は恐らく、人材の社会的な選抜と配分を決定する（と自称する）試験制度をその中核に据えた、近代的教育制度の存在である。学校は生徒たちひとりひとりの脳髓に「未来の自分の理想像」を植え付ける機能を持つからである。

子供たちは学校で、未来の理想的自己像（良い成績を取り、良い学校に進学し、良い仕事に就く人生。偉い人になろうと意欲する自分）とのギャップとして、現在今ある自分を、意識すること学ぶ。そして、絶えず今ある自己を理想の自己像に近づけてゆく努力の必要を学ぶ。近代の学校教育は、それまでの一般的な世俗道徳のように「今ある自分に満足しろ」、ではなく、その反対

に、今の自分の至らなさに対する不満を自覚させ、自己変革の必要を自覚させようとするのである。親の期待、教師の鼓舞、明治・大正期ならば更に郷党の徳憑などが、彼らの努力を下支えするだろう。戦前は教育勅語が、この努力に立身出世願望に道徳的粉飾をしていた（勉強して競争に勝つことが、お国のため、天皇陛下のためになるのだ、云々）。

しかしこの生き方は、自分の人生を生涯にわたって丸ごと功利的な願望に塗り固めるが如き世俗臭を免れない。だから試験制度の洗礼を受けた知的な子供の中から、自己の不満状態に自己改革の意志に、道徳的粉飾とは次元を異にする、形而上的な粉飾を加えることで、なんとかこの世俗臭を洗い落とそうとする者が現れる。すなわち、自分が置かれた不満状態は、「自己の本質からの逸脱状態である」と観念するのである。（当時の事として）恐らく多分に西洋文明への羨望に近似したかたちで空想されたであろう、自分の本質、ないしは理想の境地的なイメージは、今・此処とは異なる、別のどこかにある。今の自分が抱いている不満や焦燥は、その理想の境地、あるいは世俗を超越した理想の天才、といった類のイメージにあこがれているからだ、と観念すること。

そしてそこへ向かつて自己を鼓舞することで、自我は卓越した人格へと昇華されてゆく、という物語を、彼は生きる。——いわゆる〈憧憬〉の精神の誕生である。明治浪漫主義と呼ばれる文学運動がそれで、明治二十年代の文学界同人たちが先鞭をつけ、三十年代に入つて樗牛・嘲風がその仕上げをした。

〈憧憬〉の精神は、見果てぬ夢のような理想の境地や天才像と、自己との間のギャップに対しては、〈煩悶〉という精神性を付与する。〈煩悶〉の語を体現する藤村操の自殺は、明治三十六年である。

しかし、〈憧憬〉といい、〈煩悶〉といい、いずれも若い青年には似合いの言葉であるが、いつまでもそれらを振り回してはならない。それなりの年齢に応じて、人は社会の中で一定の地位や身分やらを手に入れ、固定化されてゆくものだからである（そうなっていないければ食つてゆかれない）。何かにあこがれる者は、その主体が未熟で変形可能な状態であることが望ましい。既に何かに成形され固定し果てた主体が、なおかつ若い頃と同様に、今とは異なる、何か・何処かをあこがれ続けるならば、「こんなはずではなかった」、と自分の現在を、呪い、責め苛むことになるだろう。彼には、〈幻滅〉が訪れる。いわゆる中年の悲哀という、あれである。「中年の誕生」は、〈憧憬〉の精神と関連付けて考察されるべきで、文学史上に、この主題が登場するのは、いうまでもなく自然主義文学においてである。すなわち明治三十年代末か

ら、四十年代。

試験制度は、進学・卒業といった、学校制度の内側でばかりでなく、就職、資格取得、昇進等でも、絶えず付いて回る。試験制度は、産業化に不可欠な、人材の流動性を担保する上で、近代社会が手放すことの出来ない制度、あるいは思想といつてもよいものである。従つて、時代によつてその様相は異なるにせよ、我々にとつて、この〈憧憬〉―〈煩悶〉―〈幻滅〉のサイクルもまた、試験制度と同様、何時までも他人事とはならない。「憧憬」、「幻滅」の語が、定着した所以である。と共に、明治三十年代の文学を、「浪漫主義から自然主義へ」といった類の文学史的キャッチフレーズで認識するだけでは無く、このサイクルの誕生から完成までの、生々しい記録として読む必要がある、と筆者が主張したい所以である。

本稿は石川啄木の生涯を簡略にスケッチしつつ、彼が〈憧憬〉の精神にいかに深く囚われ、またその呪縛からいかに脱したかを論ずるものである。

## 1

石川啄木<sup>2)</sup>にとつて、詩歌のお手本が『明星』、与謝野鉄幹・晶子夫妻に始まることは言うまでもないが、彼の知的アイドルは？

と問われれば、高山樗牛と答えなくてはならない。樗牛とその友人・姉崎嘲風、そして『帝國文学』と『太陽』の文化圏は、啄木のあこがれの的だった。

明治三十五年、十七歳（かぞえ歳。以下同じ）の啄木は「寸舌語」で『太陽』誌上の姉崎博士の論文「高山樗牛に答ふるの書」完結せり。其高邁なる識見欣度すべき態度共に能く一世を圧すべし」（『岩手日報』3/14）と述べ、併せて樗牛の病身を気遣い、また同紙「五月乃文壇」には「論文壇は比較的寂寞として居る。

第一に才人樗牛が病気軽からざる由で、太陽の誌上に彼の高華壯麗の論文が出来なかつたのである。然し乍ら彼の無題録は相不変燦として衆星を抜くの趣がある。（中略）彼が熱烈なる詩人性情の高渾の趣を敬せざる者誰あらう。（6/1）と書いた。さらに同年・同紙に載せた「夏がたり」<sup>③</sup>（6/21）で啄木は田山花袋「重右衛門の最後」を論評しているが、その論理的骨格は樗牛がホイットマンを論じた際（「ワルト、ホイットマンを論ず」『太陽』明31・6）に用いたそれと同趣であるといつてよい。<sup>④</sup>一方に大自然の真理・自然の要求をおき、他方にそれらを覆い隠す似而非文明あり、とする（疎外論的かまへ）の裡に、啄木は重右衛門と村人たちとの葛藤を置き、作品を読み解いている。

最初の上京（明35・11/1〜明36・2/27）から戻った啄木は「ワグネルの思想」（『岩手日報』明36・5/31〜6/10。全七回）を発表したが、それは姉崎嘲風「高山樗牛に答ふるの書」「高山

君に贈る」「再び樗牛に与ふる書」（『太陽』明35・2/8）にインスパイアされ、特に「再び」論文の骨子を真似たものである。「シヨペンハウエルは意志の否定を以て道德の根底としぬ、ニーチェは意志の拡張に世間道德の超越を教へぬ、而してワグネルは意志の融合たる愛に、人生の帰趣を求めぬ」（「再び樗牛に与ふる書」という三者の位置づけを、啄木はシヨペンハウエルをトルストイに置き換えた上で、「個性のあらゆる特殊の権能を、人道と云ふ規約の制裁の下に遠く大我の埒外に放擲」したトルストイ、「人生のあらゆる事実は凡て人間本源の動力たる権力意志の表現の、錯綜たる闘争の結果」とするニーチェ、「愛の偉大なる包有的決解を構成した」ワグネル、と言ひ換えたのである。

ほんの「序論」のところ中で絶してしまっている、啄木のこの論文から、我々が読み取るべきなのは、その内容ではなく、<sup>⑤</sup>とにかく俺も『太陽』や『帝國文学』に載るような論文を書いてみたい、樗牛や姉崎嘲風のようにになりたい、という、啄木の（憧憬）の思いの強さである。

年譜をみると、啄木は明治三十五年、盛岡中学校四年に在籍していたが、三月の学年末試験で「試験中不都合ノ所為アリタル」故を以て譴責処分<sup>⑥</sup>にふせられた、とある。「岩手日報」に姉崎嘲風・樗牛にエールを送った、先の「寸舌語」が掲載されたのと同時期である。かろうじて五年に進級したが、同じく「岩手日報」に「五月乃文壇」と「夏がたり」を載せた翌月の七月、学期末試

験で再びカンニングをして二度目の譴責処分を受けた。バカバカしくて試験勉強などやっていたいられぬ、という思いだったかと推測される(後述)。俺の思考世界は、樗牛・嘲風と同水準なのだぞ”、と言いたいところだったのであろう。

しかし、カンニングという行為は、学校が義務付ける学業を軽蔑しつつも、なお学校制度そのものには、未練がある、まだ幾らかの価値を認めている、ということを示している。学校制度が保証する「学歴というもの」、すなわち、それあつてこそ将来の栄えある自己の実現が期待できる、という意義に対する未練である。

その未練を啄木が断ち切る契機となつたのは、明治三十五年十月一日発行の『明星』に、自身の短歌が初掲載されたことである。決断には、ひと月もかからなかつた。十月二十七日、盛岡中学に退学届けを出した啄木は、その月末に東京に向かう。一度目の上京である。学歴ではなく(学歴の代わりに)文学に、彼は自己の将来を賭けたのである。

この、第一回目の上京で、啄木は与謝野鉄幹・晶子夫妻を訪れて歓談。面識を得た上で、十二月には早速、『明星』に短歌三首を発表した。その後病を得て、年明けには帰郷するが、明治三十六年に作られた短歌・詩の主な発表舞台が、早や『明星』となり、十一月には新詩社同人にも推挙された訳だから、それなりの成果を挙げた上京だった、というべきだろう。

帰郷後に書いた「ワグネルの思想」に垣間見えた、あの、樗牛や嘲風にあやかりたい、という思いは、翌・明治三十七年に、これまたみごとに実現する。啄木は、講演会で盛岡に来た姉崎嘲風に会い、それをきっかけに嘲風が創刊したばかりの雑誌『時代思潮』と、『帝国文学』への詩篇掲載の道を切り開いたからである。『明星』、『時代思潮』、そして『帝国文学』、『太陽』にと、次々と啄木は詩篇を寄せた。十七歳で中学を退学した少年が、十九歳で既に中央の学術雑誌・総合雑誌の書き手に成りお世話されたわけだ。

この年、明治三十七年の十月、処女詩集出版準備その他の目的で、十九歳の啄木は二度目の上京をする。上田敏の序詩と鉄幹の跋文、そして扉に「此書を尾崎行雄氏に献じ併て遙に故郷の山河に捧ぐ」と献辞の付された彼の詩集『あこがれ』の刊行は、明治三十八年五月である。

啄木は最高学府のヒーローたちが豊富に蓄えていた〈憧憬〉精神に鼓舞され、それに依拠しつつ、その延長上で、文学的営為を始めた。それは、彼の思惑通り、彼を一躍中央文壇の寵児に仕立てた、といつてよいのである。五年後、啄木はこの時期のことを「弓町より」(『東京毎日新聞』明42・11/30〜12/7)で、次のように回想している。

以前、私も詩を作つてゐた事がある。十七八の頃から二三年の間である。其頃私には、詩の外に何物も無かつた。朝か

ら晩まで何とも知れぬ物にあこがれてゐる心持は、唯詩を作るといふ事によつて幾分発表の路を得てゐた。さうして其心持の外に私は何も有つてゐなかつた。(「食ふべき詩(一)」)

《憧憬》の精神だけが頼りだったので。それを供給してくれた樗牛・嘲風の社会的地位に対する羨望の思ひは、学歴のかたちはとらなかつたけれども、自己の文学的名声によつて代替・達成されるはずだ——。「弓町より」(二十四歳)の啄木は、このように数年前の自分を振り返りつつ、その時の自身の企てが結局のところ、不毛でしかなかつたことを嘯み縮めている。

詩集『あこがれ』の評価が、おおよそ「早熟少年の模倣詩集」(日夏耿之介)の語に集約されることは、このことを裏付けていると考えられる。

## 2

明治三十八年、『あこがれ』を刊行すると共に、さらに啄木は自己の文学的理想を実現すべく雑誌『小天地』を創刊する。彼は文学によつて、世間に対して勝負に出たわけだが、しかし、雑誌創刊はあまりに無謀だった。当然予想される通り、どちらも経済的成功にはつながらなかつたからである。これに、父の宗費滞納による宝徳寺住職罷免、堀合節子との結婚が重なり、彼は経済的

に追い詰められてゆく。

明治三十九年、母校渋民尋常小学校の代用教員となり、小説「雲は天才である」に着手したりする。『明星』に小説「葬列」を發表(十二月)。長女京子誕生(十二月二十九日)。

明治四十年、啄木は二十二歳である。父の宝徳寺復帰が絶望となり、啄木も渋民村の代用教員生活を切り上げる(五月)。啄木、北海道に渡る。函館、札幌、小樽。

明治四十一年に入って、その一月二十一日、彼は小樽から釧路に移っている。そこを辞して、三度目の上京——結果的に終焉の地となる東京に単身、向かつたのは四月の暮れである。東京生活は、友人・金田一京助の助力の下で、しばらく小説創作に専念するが、うまくゆかない。焦燥の中で、突如、短歌が爆発的に再来する(六月二十三日から二十五日にかけて、おおよそ二百数十首)。そのうちの百十四首を翌月の『明星』に「石破集」と題して發表する。また、この中には『一握の砂』冒頭を飾る歌群(「東海の小島……」)「たはむれに母を背負ひて……」等)が含まれている。

啄木は、ずいぶん苦勞したわけだ。さて、二十歳から二十三歳の、この間の彼にいかなる変化があつたのだろうか。

「古酒新酒」(明39・1/1)は「岩手日報」に啄木が寄せた年頭所感である。彼は言う、自分は「心余りに小児の如くなり」、「我が望小ならざれば」失敗を恥としない、と。世俗的な成功の

秘訣が「世の多くの人と共に猫の眼と声と猿の智と狒々の欲を学」ぶことであることくらい、自分は承知している、と。——例の、似而非文明とそれに対抗する、あえて失敗者に甘んずることを辞さぬ、「小児の如く」俗世間の汚濁に染まらない、高い境地へのあこがれを保持する（疎外された者としての）我、という図式である。この状態を打開しうるのは、ただ「天才憧憬」のみ、「嘗て故人樗牛博士によつて当時の思想界に要求せられし時代精神界の救済」である、云々。まだ啄木に、変化は訪れていない。「林中書」（明40・3）はどうだろうか。この論文は日露戦争後の日本社会を批判して、「此主憲国の何の隅に、真に立憲的な社会があるか」といい、「一等国になつた」と騒ぐ世情に「戦争に勝つた国の文明が、敗けた国の文明よりも優つて居るか否か？」と疑問を投げかけた、地に足が着いた側面を持つ教育論である。しかし、その論理構造はいまだ樗牛の圏域を出ていない。

真の人と真の精神とあれば、他に何もが無くても立派な教育は出来る。若し夫れ完全な教育学と学制とがあつても、それを活用する「人」が無ければ、一切のものが無いよりもまだまだ危険な結果に陥る。樗牛博士が云つたではないか、「新しき声の最早響かずなれる時、人は其中より法則なるものを選び出す」と。

「真の人と真の精神」抜きならば教育とは言えない、と啄木はいう。樗牛の「新しき声の……」云々の言葉を、啄木はこれまでも「無題録」（『岩手日報』明36・12）、『戦雲余録』（『岩手日報』明37・3）で引き、またこの後「北海の三都」（明41・5）でも引用していた。樗牛のこの言葉の主旨は要するに、文明化とは人間の精神が活力を失つた結果であり、社会の墮落だ、ということである。しかし「真の人」は誰か、「真の精神」とは何か、を明らかにする公正な手立ては、恐らく無い。ましてやそのような人物を教員として採用することが、誰にできるだろうか。——これは、教育論としては不毛な議論である。

続けて啄木は、母校在学中に（『林中書』は「盛岡中学校校友会雑誌」に寄せた文章なのだ）起こつた、彼自身の精神的な事件を語る。「子は母校在学中に或一の疑問と一の煩悶とを与へられたのだ。此疑問、此煩悶は、国文法や幾何や三角やの如く安価なものでは決して無い」。それは「臍ろ氣に瞥見した、『人生』といふ不可測の殿堂の傍と、現在自分の修めて居る学科、通つて居る学校との間に何の關係もないらしいといふ感じであつた。『学生』の殿堂を夢想」する「煩悶」と、「教育の価値」への「疑問」が、「三十五年の秋、家事に或る都合の出来た時、余をして別に悲しむ所なく、否寧ろ、却つて喜び勇んで、校門を辞せしめたのであつた」と。自身の中学校退学時の心境説明である。この、精神的覚醒から導かれる教育学的な主張は、「教育の最高目的は、

天才を養成する事」であり、翻つて「日本の教育は、凡人製造を以て目的として居る」という、当時の教育界への批判が続く。教育論としては、やはり不毛と言わざるを得まいが、それもさることながら、ここではむしろ、『人生』の殿堂を夢想「すること」(「憧憬」)の精神が、はつきり「疑問・煩悶」と結び合わされてゐることに着目しておきたい。『林中書』においても、まだ啄木に変化は訪れていない。

「卓上一枝」(『釧路新聞』明41・2)は、本稿にとつて重要な論文である。

全六章に分かたれているうち、「二」から「六」(の大部分)は、いわば明治三十六年から三十七年にかけての、『帝國文学』、『太陽』的教養圏へのおこがれと、それ(「憧憬」)を原動力とした啄木の勉強・精進(「ワグネルの思想」に象徴されるような)のおさらいである。

「二」―「人生自然の真と相去る」ところの「一切の法則と虚偽と誤れる概念と(で成り立つ似而非文明……引用者注)を破壊して、在るが儘なる自然の真を掲げ来る」べし。『文壇を賑わしている自然主義の存立理由を説明する形にはなっているが、要するに樽牛流の(疎外論のかまえ)の反復である。

「三」―「人は自然に叛逆す、我等は人に叛逆を企つべきのみ」。  
 「人」とは俗社会(似而非文明)の住人、「我等」とは(「憧憬」精神)の持ち主たちを指す。

「四」・「五」―その実践者、英雄・ニーチェ。

「六」―ニーチェの「自己拡張の意志」とワグネルの「自他融合の意志」の両面こそが、「宇宙」の、「人生」の真理であり、この両面より生ずる「一切の矛盾、一切の撞着、凡そ人生を混乱せしむる一切の因」は、「最後の理想的人格の予想によつて解決し得らる」。『天才主義』。此立論は予が唯一の哲学なりき。

しかし、問題は「六」の末尾である。

然れども悲しい哉、予の哲学は予に教ふるに一事を剩したり。曰く笑ふ可きか、はた泣く可きか。

予は、予の半生を無用なる思索に費したるを悲しむ。知識畢竟何するものぞ。人は常に自己に依りて自己を司配せんとす。然れども一切の人は常に何者にか司配せらる。此「何者」は遂に「何者」なり。我等其面を知らず、其声を聞かず。

「卓上一枝」は啄木が自然主義に言及した最初の文献であることを意識すれば、末尾で触れられる「何者」を、「時代閉塞の現状」(明43・8)に言うところの「強権」に繋がるところだろうが、本稿が強調したいのはそこではない。「二」から「六」で復習された、樽牛流(「憧憬」精神・(疎外論のかまえ)、「予が

唯一の哲学なりき」と自称するものを、ここで彼が「無用なる思索」と呼んだ点である。自分の半生は、笑うべきか泣くべきか、無用な思索に費やただけだった、という自覚。

「一」の末尾が「人生を司配する者、汝なりや將た彼なるや」とあったのは、言うまでもなく論文全体を締めくくる右（「六」末尾）の一節と呼応させるためである。してみれば、この文章を単に勃興しつつある自然主義文学を論じたもの、と捉えるのは適切でないだろう。自然主義文学を論じた長谷川天溪の論文「現実暴露の悲哀」（『太陽』明41・1）に触発されつつも、この論文「卓上一枝」で啄木は、これまで自己を拘束してきた思想のかまへに対して、その限界を見定めようと試みているのである。

「一」の冒頭から繰り返される、「どうにか成る」の語が、キーワードである。

人既に死生の大事に会す。其力量、其思慮、遂に及ばず。茲に至つて無然として嘆じて曰く、「どうにか成る」

「どうにか成る」は、自分の力量や思慮・分別の限界を自覚した時の謂いである。ありきたりな日常語である。啄木は、この凡庸な言葉「どうにか成る」を、長谷川天溪の論文に重ね合わせるのだ。

吾れ等現代の人々は幻像を失ひて後、帰るべき家なく、倚るべき保護者なきにあらずや。実に宗教も哲学も、其の權威を失ひたる今日、吾れ等の深刻に感ずるものは幻滅の悲哀なり、現実暴露の苦痛なり、而して此の痛苦を最も好く代表するものは、所謂自然派の文学なり。

（長谷川天溪「現実暴露の悲哀」明41・1）

一切の生活幻像を剥落したる時、人は現実暴露の悲哀に陥る。現実暴露の悲哀は涙なき悲哀なり。何となれば人一切の幻像に離れたる時唯虚無を見る。虚無の境には熱もなし、涙もなし、唯沈黙あるのみ。此境に入れる者は所謂平凡なる悲劇の主人公なり。どうか成ると言ふ人なり。

（啄木「卓上一枝」明41・2）

両者の時代認識に、大した違いはない。啄木は、長谷川天溪に倣つて、同じようなことを述べているにすぎない。これ見よがしに、と言いたくなるほど露骨に。流行の自然主義文学について、天溪のように尤もらしいことを、啄木も何か言っておきたかったのであるのか？ しかし、それは、違うのである。

「幻滅の悲哀」、「現実暴露の苦痛」、これらは、まさに「憧憬」に対応しそうな、文学的雰囲気を含んだ言葉である。だから印象的で、後世にまで残ったのだ。しかし啄木は、「幻像」「現実暴露

の悲哀」の語を敢えて用いて、自分の論文が長谷川天溪のそれに依拠するものであることをあからさまに誇示しつつ、「幻滅の悲哀」ではなく、それをありきたりな「どうにか成る」に言い換えている。何故か。今、問題としようとしている事柄が、文学者、芸術家だけの話ではない、と彼は考えているからだ。

自然主義文学の流行が含意しているのは、単に文壇内部、或いは文学潮流の問題ではなく、「平凡なる悲劇」、「平凡なる悲劇の主人公」に関わること、すなわち日本社会の全体に関することだ、と受け止めているのである。だから「生活幻像」が剥落した後の人々の悲哀は、文学趣味にかぶれた青年の喜びそうな新和製漢語「幻滅」で語られるべきではない。そうではなく、平凡この上ない言葉、「どうにか成る」こそが相応しい、そのように、正しく表現されなくてはならぬ、と啄木は主張しているように思われる。

学校をドロップアウトしても、人は学校化された社会から自由になれるわけではない。最高学府のエリートたちに憧れ続けた啄木は、中学校退学後も依然として学校化社会の虜であった。そして、彼等エリート達も認める程に、彼等の真似が上手に出来るようになった後においても、啄木が手に入れることができたのは、結局のところ、「どうにか成る」――つまり、「どうにもならない」状況に人間が落ち込んだ時に出て来る言葉だけだったわけである。

青年たちを魅了してやまなかった、樗牛的文化圏・〈憧憬〉精神の、その行きつく果てが啄木によくやくハッキリと見えたので

ある。彼は鉏路を去り、東京行を決意する。

### 3

東京本郷の赤心館に金田一京助と同居し、小説創作の努力と、その合間、突然の歌興の湧出があつた明治四十一年、選者としてまた自らも短歌・詩を載せて活躍した『明星』が十一月五日を以て終刊となる。しかし、その後継というべき雑誌『スバル』の準備に啄木は加わり、翌・明治四十二年一月一日『スバル』創刊号に発行名義人として名を連ねることになる。啄木二十四歳。詩壇において、地位を確立したということであろう。しかし、カネにはならない。

明治四十二年二月、朝日新聞社に校正係として入社決定。一家離散状態だった石川家が東京に集まるのは六月十六日である。一家が上京するまでの最後の『独身生活』期間に、『ローマ字日記』が書かれる（浅草、私娼窟通い）。一家同居後、姑との不和確執から、妻・節子の家出事件が起こった（10/25〜10/26）。

『ローマ字日記』については、そこに描かれた地獄めぐりの様について、以前筆者は「かつての自由民権家たちが怠慢にも回避してしまつた、己の内なる土族根性との対質と、それを通しての人権思想の吟味―内面化、という作業になぞらえられるのではないか。啄木の場合、土族根性に対応するのは、恐らく学校制度の

下で植え付けられた誇大な自尊心とその裏返しとしての社会に対するルサンチマンである」との見解を示したことがあり、今も特に変更の必要を感じていない<sup>6)</sup>。ただ、本稿は「学校制度の下で植え付けられた誇大な自尊心」の内実を、樗牛・嘲風に代表される帝国大学エリートへのあこがれ・彼等の「憧憬」精神、とより具体的に絞り込んで、論を進めて来たのである。ここでは、先の「卓上一枝」と繋がると思われる論点について述べる。

「幻滅の悲哀」ではなく、ただ「どうにか成る」だ、というところには啄木の真意があるのではないか、という「卓上一枝」について示した筆者の見解は、先にも触れた「弓町より」の引用箇所<sup>5)</sup>に続く、次の一節と関わっている。

自分で其頃の詩作上の態度を振返つて見て、一つ言ひたい事がある。それは、実感を詩に歌ふまでには、随分煩瑣な手續を要したといふ事である。譬へば、一寸した空地に高さ一丈位の木が立つてゐて、それに日があたつてゐるのを見て或る感じを得たとすれば、空地を広野にし、木を大木にし、日を朝日か夕日にし、のみならず、それを見た自分自身を、詩人にし、旅人にし、若き愁ひある人にした上でなければ、其感じが当時の詩の調子に合はず、又自分でも満足することが出来なかつた。(「食ふべき詩(一)」明42・11/30)

また、

我々が「淋しい」と感ずる時に、「あゝ淋しい」と感ずるであらうか、将又「あな淋し」と感ずるであらうか。「あゝ淋しい」と感じた事を「あな淋し」と言はねば満足されぬ心には徹底と統一が欠けてゐる。大きく言へば、判断||実行||責任といふ其責任を回避する心から判断を胡麻化して置く状態である。(「五」同・12/5)

要は言葉の問題なのである。詩を書く、或いは文学に関係すると意欲した途端に、何か特別な事を仕出かそうとしているのだと自惚れ、身構える、気取つてしまう。そんな習慣が、自分の心の奥底を縛り付けている。その縛りは、言葉を知らず知らずに選別し、自己の感性までも規定しているのだ、という自覚が「弓町より」の啄木、二十四歳の啄木にはあり、そのことが気になって仕方が無くなつていたのである。

「弓町より」に続く論文「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(『スバル』明42・12)で、啄木は田山花袋を批判する。批判というよりは、八つ当たり、と言うべきかもしれない。

其不満足は、一言に言へば、即ち、田山氏が徹頭徹尾文学者であるといふ事である。

引きくるめて言へば、氏は人生を「描くべき事実」として取扱ふ事即ち氏自身「文学者なり」といふ自信にあまりに熱心なる為に、文学者といふ職業を離れたる赤裸々な田山氏自身と人生との關係を不問に付して置くやうな傾きがないかと思う。……田山氏は文学を人生に近づかした、さうして遠ざからしめた。(まだ言ひ足らぬが、)さうして其処に、私の今の心持から言へば、田山氏の人としての卑怯があると思ふ。

言葉を、たとえそれが文学の場においてであつても、文学的構えて用いる(文学者然として用いる)ことは、「徹底と統一」の欠如、責任回避、判断の胡麻化しであると「弓町より」で宣言した啄木は、ここで花袋を「人としての卑怯がある」と、断罪するまでに至っている。田山花袋への、この批判の熱量は、一体どこからきたのだろうか？

「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」の「原稿断片」とされるものに、次の一節がある。

十七歳の頃から、「詩人」といふ言葉が、赤墨汁のやうに私の胸に浸み込んだ。「天才」といふ言葉が、唐辛子のやうに私の頭を熱くした。髪の毛の柔かい、眼の生々した、可愛らしいセキソトキシンの中毒者は「無限」「永遠」「憧憬」「權威」などといふ言葉を持業にしてゐた。それは明治三十五年

頃からの事である。

彼の心の奥底を縛り付けていた、習慣と化した心的制約の正体は、〈憧憬〉精神であつた。そのみが彼にとつての文学であつた。だから、〈憧憬〉精神からの離脱は、およそ文学的な雰囲気・かまえ・態度全般に対する、忌避、嫌悪、さらには(道徳的臭気さえ帯びた)指弾にまでエスカレートしていったのだろう。

その、否定し去られるべき文学的雰囲気の中に、でんと居座つた存在の代表として、花袋は召喚されていたのである。確かに、少女へのあこがれ小説から出発して、中年の悲哀小説に至る作家(その経緯をもつとも明確に描いたのが「少女病」『太陽』明40・5)である)の代表として、花袋はあまりにも適任であつた。

木股知史氏が、その卓抜な『ローマ字日記』論<sup>⑦</sup>の中で、柳田國男「国語の将来」(昭14・5)に触れていた。

多くの漢語が一般化し、普通人の会話の中でも盛んに用いられるようになったのは「読書万能主義の確立した明治以後」であり、「相手構はずの漢語を使ふ風は此時から起り、終にはどんな字を書くなど、畳の上に書いて見せたり、健康の康の字など、いちいち言ひ添えたり、其他これに似よつた補助手段を用ゐないと、満足には話の出来ない国に、日本をしてしまつたのである」との柳田の発言を、氏は引いておられる。明治期の言文一致運動は、書

き言葉の話し言葉化ではなく、新たな書き言葉の規範化、それも従来以上に漢語に依存する口語文体の規範化であった、という側面に着目し、その文脈に『ローマ字日記』を置くためである。

木股氏は、口語化を進めても、かえって漢語の優位性を高めてしまっている明治期の言語状況の中で、ローマ字表記を採用することによって、啄木が「漢字仮名交り表記では隠されていた音声言語」を鮮明にしようとしたのだ、と主張する。この指摘を、本稿の文脈に援用させていただけば、こうなる。

『ローマ字日記』は、ローマ字表記を選択することによって、同音異義語の多い漢語をとりわけ意識化する必要を自らに課したが、その最深の動機は、明治の新和製漢語の呪縛から自己の内面世界を解放しようという試みであったのではないか。彼は絢爛たる修辭の才の持ち主であり、それゆえに、翻訳の必要上次々に作られた明治の和製漢語の話し言葉への進出・圧迫には敏感だったに違いない。また、和製漢語の侵入は、まずは東京方言という話し言葉から始まったはずで、啄木にとってそれ、東京方言を操ることが意識的な努力を要する行為であっただろうことも、敏感さを助長した可能性がある。彼が〈憧憬〉精神にイカした度合いの高さは、これらのこととも関連があらうと思われる。

ただ、この試みは、当然のことながら、ただ言葉遣いを改めることにした、といったレベルの問題ではない。今までの自己、すなわち明治の新和製漢語の典型・「憧憬」の語が指し示す精神に

心奪われ続けて来た、啄木自身の内面世界を、揺るがし、そこに亀裂を入れ、更には崩壊の危険を招くことにも繋がりがかねないだろう。もし、そんな恐ろしいことが起こつたら――。とはいえ、それは覚悟の上である。何しろ、彼は既に「どうにか成る」と啖くより仕方のない境地に立たされていたのだから。『ローマ字日記』は、そのような意味での、自己の内面世界破壊のドキュメントである。

※

窮した時に、人が「どうにか成る」と啖くのは、何故だろうか。それは、自分はどうにもならない、と観念した時に啖かれる言葉であろう。本当に、もうどうにもならなくなったのだ。しかし、どうにもならなくなった時も、どうにもならなくなった自分」は、なお厳として、今、ここに、あり続けている。そんな存在感覚を引き受ける表現が「どうにか成る」なのであろう。未來は真つ暗闇、過去は滅茶苦茶に砕け散ってしまった後の、今、ここだけの自分。自分は、一瞬、一瞬の狭間に、だらしなく引つかかっている、えたいの知れないシロモノなのだ。次の瞬間、何に成り変つてゆくかもわからない、「どうにか成る」しかない自分。

『ローマ字日記』でそうした境地を実況報告(?)した啄木は、明治四十三年、こうした自己の境地を、真正面から見据え、それを短歌のかたちに刻み付けたのである。

明治四十三年六月、各紙は大逆事件を報道した。啄木自身「思想上に於ては重大なる年なりき。予はこの年に於て予の性格、趣味、傾向を統一すべき一鎖鑰を発見したり。社会主義問題これなり」（『明治四十四年当用日記補遺』○前年（明治四十三）中重要記事）と記している通り、この年の啄木の動向が、社会主義との関連で論じられる傾向を強くもつのは、当然である。しかし、ここではその問題はしばらく措き、啄木と文学の関係、その仕切り直し、ともいうべき問題に話を絞る（明治四十三年九月に開設された「朝日歌壇」の選者に、啄木は抜擢される。前年十一月に開設された「朝日文芸欄」と並ぶ格好になるわけで、「文芸欄」の方の編集責任は夏目漱石が引き受けていた。漱石は「朝日文芸欄」の実務を森田草平に委ね、その執筆陣には自らの取り巻き連・「木曜会」メンバーや、阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆、魚住折蔵らを盛大に登用した。「一年間の回顧」『「スバル」明43・1』で、啄木は彼等の盛んな自然主義派への批判・攻撃を「青年大学派の崛起」と呼んでいる。後述する、「時代閉塞の現状」成立前後の背景のひとつである）。

『一握の砂』（明43・12）は明治四十一年夏以降の短歌千首余のうち、五五一首を取めた歌集で、特に明治四十三年の歌が約八割を占める。五つの章に分かれた、「我を愛する歌」（大部分が明治四十三年の作）、「煙」（これも大部分が明治四十三年の作。盛岡

中学時代の回想と故郷びとの群像を歌ったもの）、「秋風のころよき」（明治四十一年の作歌を主とする）、「忘れがたき人々」（ほとんど明治四十三年の歌。主に北海道放浪を歌う）、「手套を脱ぐ時」（ほとんど明治四十三年の作。東京での生活歌）という風にまとめられている。

『ローマ字日記』と『一握の砂』の関係については注(6)の拙稿ですでに触れたので、本稿では略記するにとどめよう。すなわち「ローマ字日記」の自己破壊の主題と直接的に関わる歌として、「我を愛する歌」所収歌（たとえば「けものめく顔あり／口をあけたてす／とのみ見てるぬ／人の語るを」等）を論じた。また、そこに窺われる〈安楽〉の希求願望は、「煙」所収歌（たとえば「やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けと」とくに「等。〈安楽〉の希求が、自然に向かった場合」と、「手套を脱ぐ時」所収歌（たとえば「孩児の手ざわりのごとき／思ひあり／公園に来てひとり歩めば」等。〈安楽〉の希求が、社会に向かった場合））につなげて、それぞれ論じた。そこで本稿では、『一握の砂』そのものではなく、この歌集、とくに「我を愛する歌」を中核とする明治四十三年の作歌を成立させた理論書ともいえるべき「一利己主義者と友人の対話」（創作『明43・11』）を読むことで、啄木における文学の仕切り直しを考察することとしたい。

タイトル通り、この小論はAⅡ「一利己主義者」とBⅡ「友人」との対話である。Bはさいきん食事付きの下宿を出て、外食生活

を始めたときAに言い、Aはその報告を「羨ましいね君の今のやり方は、実はずっと前からのおれの理想」だった、と受けているから、理論的にはBの先行者と考えて良いようだ。現在の啄木(A)と、ちよつと前の啄木(B)との対話。

Bが新しく始めた、という外食生活は、此処(下宿先。自分の生活拠点)ではない、どこか別の場所で飯を食う自由を確保する手立てである。Aは、それならいつそ「眠る場所」も毎晩変えちやどうだ、と茶々を入れるが、要するにBの試みは、例の(憧憬)精神のパロディなのである。だからAは「しかし君はそのうちに飽きてしまつておつくうになるよ」、そして「その時おれは、『どうとう飽きたね』と君に言ふね」と、Bの試みの行き着く末を予言できるのだ。これが前半。後半から歌論が始まる。

近頃、何首、何十首の歌を全体として見る傾向を指して「そんなら何故それらを初めから一つとして現さないか」と批判したのがあつたが、これについて、Aはこう反論する。

しかしあの理屈に服従すると、人間は皆死ぬ間際まで待たねば何も書けなくなるよ。……一時間は六十分で、一分は六十秒だよ。連続はしてゐるが初めから全体になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からきれぎれに歌つたつて何も差支へがないぢやないか

一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。

おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。

『一握の砂』の「我を愛する歌」の自己解説の感がある。「おれ自身が何よりも可愛い」。しかし、恐らくそれは、事の半面には足りない。この文章末尾の対話が、次のように続くからである。

A (間) おれはしかし、本当のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B どういふ意味だ。君はやつぱり歌人だよ。歌人だつて可いぢやないか。しつかりやるさ。

A おれはおれに歌をつくらせるよりも、もつと深くおれを愛してゐる。

B 解らんぬ。

A 解らんぬかな。(間) しかしこれは言葉でいふと極くつまらんことになる。

B 歌のやうな小さいものに全生命を託することが出来ないといふのか。

A おれは初めから歌に全生命を託さうと思つたことなんか  
ない。(問) 何にだつて全生命を託することが出来るもん  
か。(問) おれはおれを愛してはゐるが、其のおれ自身だ  
つてあまり信用してはゐない。

《憧憬》精神からの離脱という観点から、右の対話を考察しよ  
う。

「きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からきれぎれに歌  
つた」歌、「いのちの一秒」を愛おしむ歌を、彼は、「いのちを愛  
するから」、「おれ自身が何より可愛いから」歌うのだ、という。  
彼が「利己主義者」と呼ばれる所以だろう。だが、その彼が「お  
れはおれに歌をつくらせるよりも、もつと深くおれを愛してゐ  
る」といつているのは、一体なぜだろうか。「いのちの一秒」を  
愛おしむ行為は、本当の愛ではないからである。それは確かに自  
分を「可愛い」がる行為ではあるが、同時にそれは、自分を「き  
れぎれに」してしまふ行為なのだ。自己の統一性を諦める、どこ  
ろかそれを攪乱すること、つまり自己の内面への、殲滅的な攻撃  
でもあるからである。

自己の魂が《憧憬》精神に冒されているから、彼は自分自身に  
攻撃を仕掛け、この世から抹殺しなければならぬ。自己を救済  
しようという意味では、それは愛だが、自己への攻撃である、と  
いう意味では、自己を嫌悪し、憎悪することもある。そうする

以外には、どうしようもないから、彼はそうするのである。では、  
破壊の後に、何が起こるのか。彼に、何か、確かな見通し、  
“でも、あつたのだろうか？ 否、

「どうにか成る」

『一握の砂』の革新的意義の中心にあるのは、その先に何が  
待つているのかもわからぬままに、啄木に決行を促した、この自  
己破壊衝動のエネルギーである。

それは、《憧憬》―《煩悶》―《幻滅》のサイクルの中に安住する、  
文学なるものを信じる、おめでたい精神からの決別であり、また、  
古い自己を一新して、新たな自己・より高次の人格を確立しよう、  
といった優等生的精神の棄却である。この決別と棄却の後に、真  
の自由への目覚めの契機が、啄木に訪れる。

《憧憬》は元々、現在の自分に「本質から疎外された存在」と  
いう哲学的意匠を施す精神であるから、日々の些事のアレこれに  
惑う自己の卑小な姿から目を逸らす働きがある(《煩悶》)という  
いわくありげな覆いを被せる。だとすれば、その精神に冒され  
た自己を否定し去つたあとに到来するのは、今まで真剣には考え  
てこなかった、現在を真に生きている、現実、受肉している我を、  
全身全霊で引き受ける決意、であろう。現世を受苦者として生き  
る我への、真摯な凝視。

「時代閉塞の現状」（明43・8）は、魚住折蘆「自己主張の思想としての自然主義」（『東京朝日新聞』明43・8/22、23）読後の反発から生まれた論文である。

魚住が「自然主義」を、「現実的科学的従つて平凡且フエータリステイックな思想」（啄木はこれを「自己否定的傾向（純粹自然主義）」と呼んでいる。「フエータリステイック」は宿命論的な意）と「意志の力をもつて自己を拡充せんとする自意識の盛んな思想」（啄木はこれを「自己主張的傾向」と呼んでいる）との「奇なる結合」、とするのは、まあ良い。事実、「自然主義」には確かに、そうした両面があるから。啄木はそのことを認めている。ただ、両者の「結合」の契機として、「共同の怨敵」すなわち「オーソリテイ」があつた、と魚住が主張している点、啄木の逆鱗に触れた。——字面をみれば、そのように書かれている。そこで、日本の自然主義のどこに「オーソリテイ」、すなわち（啄木の言葉に直せば）「強権」との確執があつたか、という自己の問題提起につなげてゆくわけだが、筆者は啄木のこの主張を別の角度から見ておきたいのである。

魚住の立言に啄木が苛立つた真の原因は、「強権」との確執云々の問題よりも、それ以前のところにあつたのではないだろうか。

魚住は、ルネッサンスと宗教改革、また、十八世紀ドイツの啓蒙主義と敬虔主義との「滑稽なる連合」が形成されたのは、共に「共同の敵たるオーソリテイ」すなわち教会があつたからだ、と指摘する。そして、この歴史的事例を、いかにも秀才らしく、ただ機械的に参照・応用して、自然主義Ⅱ「自己主張的傾向」と「自己否定的傾向」との「奇なる結合」なるものの歴史的契機の説明に当て嵌めていたのである（ただ、この場合の「共同の敵たるオーソリテイ」は勿論教会ではなく、「国家である、社会である」と付け加えることを魚住は忘れない）。筆者は、魚住のこの説明のしかた自体に、啄木が苛立つているように思われるのである。両者が「結合」しているように見える、そのことの意味を、魚住は本気で考えようとしていない、と。

自然主義に、「自己主張的傾向」と「自己否定的傾向」の両面がある、という事実は、啄木にとつては決して他人事ではなかつた。思想的常識に従つて整理・説明されれば終わる、といった類の話ではなかつたはずだからである。

自然主義の両面的性格については、すでに島村抱月が次のように論じていた。

十九世紀初頭の自然主義と、十九世紀後半の自然主義との間には、如何なる曲折を蔵するか。吾人の見るところを以てすれば、此の曲折はやがて自然主義がロマンチズムの中から

分家して本家を領するに至る経過である。ロマンチズムを一家に譬ふれば、「自然的」、「情緒的」以下五六の兄弟が同じ屋の下に同居してゐた。然るに此等の兄弟中「自然的」と名のつくもの与其他の兄弟等とは性来が違ふ。彼等は不和であつた。而して「自然的」は自ら分家した、他からの来援を得て遂に自然主義といふいかめしい看板を上げ、本家を横領するに至つた。(島村抱月「文芸上の自然主義」明41・1)

自然主義はロマン主義から派生した、という説明である(「他からの来援」とは、「実験科学」、「進化論」、「社会問題」等)。「時代閉塞の現状」の次の一節は、右の文章を幾らか意識しているように思われる。

自然主義と称へらるゝ自己否定的の傾向は、誰も知る如く日露戦争以後に於て初めて徐々に起つて来たものであるに拘らず、一方「自己主張的傾向」のこと。——引用者注)はそれよりもずつと以前——十年以前から在つたのである。……此結合は、前にも言つた如く、両者共敵を有たなかつた(一方は敵を有つべき性質のものでなく、一方は敵を有つてゐなかつた)事に起因してゐたのである。……純粹自然主義は実に反省の形に於て他の一方(「自己主張的傾向」のこと。——引用者注)から分化したものであつたのである。

……初めは両者共仲好く暮してゐた。それが、純粹自然主義にあつては単に見、而して承認するだけの事を、其同棲者が無遠慮にも、行ひ、且つ主張せんとするやうになつて、其処に此不思議なる夫婦は最初の、而して最終の夫婦喧嘩を始めたのである。実行と観照の問題がそれである。(三)

まず「自己主張的傾向」があつた。何時からかそれは「自己否定的傾向」と同棲し始めた。そして両者は最初で最後の夫婦喧嘩をし、離婚した。今「自己否定的傾向」は「純粹自然主義」という名前で羽振りを利かせている……。家族の喩で、明治浪漫主義と自然主義の連続性を説明しているわけである。西欧文学におけるロマンチズムと自然主義の關係を説明する抱月と、ほぼ同じ。最初にあつた「自己主張的傾向」、つまり明治浪漫主義は、啄木に於ては、樗牛・姉崎文化圏にあこがれ、夢中になつていた自身記憶と切り離して考えることが不可能のはずである。「自己主張的傾向」と「自己否定的傾向」の重なり・連続とは、すなわちその(憧憬)精神が、(幻滅)に至るプロセスのことに他ならない。それは、息苦しい、どん詰まりの日々への下降として、啄木に経験された。そのように生きた、この十年近く啄木の生活事實そのものなのだ。「時代閉塞の現状」の最終章に、樗牛の個人主義の破滅の原因)についての言及がくるのは、必然というべきである。

今、事後的に振り返るかたちで、「自然主義」を、「自己主張的傾向」と「自己否定的傾向」の「結合」として学究的に論ずることとも、自然主義文学を巡る錯綜した議論を整理する上では有益な面を持つてはいよう。確かに間違いいとはいえない。いえないが、しかしそれは、人生の実相——啄木一人のそれのみではなく、日本人全体の実相を汲み取った説明には少しもなっていない。しかも魚住折蘆は、この「結合」なるものは、「オーソリテイ」との対決を契機として形成された、などと、としたり顔で説明したのである。啄木は我慢がならなかったに違いない。

しかし、単なる教養として、ロマン主義と自然主義の関係を説明した島村抱月の文章も、啄木にとつて心に響く何物も含んではいなかっただろう。魚住・島村の二人は、自分が熟知していると思ひ込み、疑おうともしない事柄（自然主義、その自己主張的傾向と自己否定的傾向の混在、分離の必然）の意義を、あたかも他人事のように語るのみで、真剣に考えていない、と啄木は見做していたに違いない。

自然主義文学の抱える問題は、〈幻滅〉時代をいかに生きるか、という日本人全体の問題なのである。それを、「どうにか成る」という位相で取り組もうとしたのが啄木だった。

おわりに

「時代閉塞の現状」で、

我々青年を圍繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなつた。強権の勢力は普く国内に行亘つてゐる。（四）

という認識に達した啄木が、この一節に続けて、勢い盛んに「我々は一齐に起つて先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ」と書いたこと、そしてこれと並行して社会主義文献の本格的な学習、大逆事件への深い関心へ向かつていたこと、また彼が翌年・明治四十四年、『呼子と口笛』の諸篇（たとえば「激論」のナルシシズム、「墓碑銘」の労働英雄志向等）を作詩するに至つたことを、決して軽んずるわけではない。けれども、また、手放しに評価するわけにもゆかない。それらの詩は、「どうにか成る」の位相からの、何がしかの逸脱、ロマンチズムへの後退があるからである（クロボトキン他の社会主義文献から啄木が紡ぎ出した、より高次な人格・思想的〈前衛〉イメージに対する、前のめりの羨望<sup>④</sup>）。

「どうにか成る」の位相で〈幻滅〉時代を生きる、ということ、「強権の勢力」が「普く国内に行亘つてゐる」、「時代閉塞の現状」を生きる、ということは、先に述べた、現在を真に生きている、

現実を受肉している我、受苦者として生きる我への凝視を促すもの、否、凝視そのものを指す。閉塞した時代に受肉している我の苦しみ、我々自身の閉塞状態を、本質からの疎外状態としてではなく、真の姿として感知すること。どのように真にみじめで、また、どのような真の安楽を必要としているのかを自覚すること。そして、それを覚知するためには「強権」との対質が不可欠であることを、覚悟すること。

我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。

(「四」)

明日の考察！ これ実に我々が今日に於て為すべき唯一である、さうして又総てである。(「五」)

我々は今最も厳密に、大胆に、自由に「今日」を研究して、其処に我々自身にとつての「明日」の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。(「五」)

啄木がここで主張しているのは、真の理想というものはあこがれの対象ではない、ということである。確実な理想は、時代閉塞の「今日」に受肉した者の、「明日」の必要以外にはない、とい

うことである。「時代閉塞の現状」で主張される右の提言の含み持つニュアンスを理解するためには、〈憧憬〉精神から離脱するために啄木が経験した、苦渋と困難さへの想像力が、おそらく必要なのである。

明治四十四年二月四日、慢性腹膜炎と診断され、青山内科十八号室入院。三月十五日退院するが、肺結核が進行し次第に衰弱。家族間のトラブルも続く。

明治四十五年三月七日、母かつ死去。追うように、四月十三日、啄木死去。享年二十七歳。

※

「田園の思慕」(『田園』明43・11)で啄木は、「独逸の或小説家」が書いた小説の一節を紹介する。田舎から都会に出て来た一代目は「温かい田園思慕の情を抱いて冷たい都会の人情の中に死ぬ」。その子(二代目)は父の寝物語に聞かされた故郷の佛を「恰度お伽噺の『幸の鳥』のやうに」思慕することで、過激なる生活に困憊した彼等の心を癒す。一代目と二代目に、本質的な違いは無い。しかし三代目は「思慕すべき田園ばかりでなく、思慕すべき一切を失つてゐる」。何故なら、都会生活がもたらす「官能の鋭敏と徳性の麻痺」が、何かを思慕するという「美しき良心」そのものを、彼等から奪うからである。

この三代目の運命を、啄木は日本の未来の姿に重ねる。時代閉

塞の現代は、「一切の人間をして思慕すべき何物をも有たぬ状態に歩み入らしめる」のではないかと。しかし、にも拘らず、「私は私の思慕を棄てたくはない。益々深くしたい」と、彼はいう。

それは、今日にあつては、単に私の感情に於てではなく、權利に於てである。私は現代文明の全局面に現はれてゐる矛盾が、何時かは我々の手によつて一切消滅する時代の来るといふ信念を忘れたくない。安楽を要求するのは人間の權利である。

この一節（「安楽を要求するのは人間の權利である」がクロポトキンの言葉）は、クロポトキンの思想を、英雄志向的・ロマンチズムの位相において（つまり『呼子と口笛』だけではなく、「どうにか成る」的位相において、啄木が受け止めた証拠である。

注

(1) 「憧憬」については、姉崎嘲風「美的生活と意的生活」『帝國文学』明45・2に証言があり、「幻滅」は長谷川天溪「幻滅時代の芸術」、『太陽』明39・10で彼が造語したものとされている（幻滅時代の芸術とは自然主義文学を指す）。それぞれ『日本国語大辞典』を参照。ちなみに、

長尾宗典『憧憬』の明治精神史—高山樗牛・姉崎嘲風の時代（べりかん社。平28・10）に、「どうやら夏目漱石は、〈憧憬〉を、恋愛問題や人生問題に「煩悶」する若い学生層の間に広がる、軽薄で悪しき思考態度と認識していたようだ」との指摘がある（11頁）。

(2) 本名・石川一（はじめ）。啄木は号（他に翠江、麦羊子、白癩生。本稿は啄木で統一する）。明治十九年に生れた彼は、小学校入学の初めから校長による教育勅語の「奉読」を「謹聴」したほぼ最初の世代であり、また小学校時代を通じて進級ごとの試験と卒業時にも試験を課せられた、ほぼ最後の世代に属する（「改正小学校令施行規則」が出され、小学校における進級・卒業試験制度が廃止されたのは、啄木が盛岡市立高等小学校を卒業した明治三十一年の翌々年の八月である）。

(3) 「夏がたり」は『石川啄木全集 第四巻』（筑摩書房。昭55・3）で「参考資料」とされている。署名「ハノ字」ゆえだが、当時啄木が用いていた「白癩（はくひん）」の頭文字をとったものとの推定から全集に収められた由である（『岩城之徳』「解題」参照）。

(4) 拙稿「漱石・樗牛のホイットマン論（上・下）」（藤女子大学『国文学雑誌101・102』令1、6・12）参照。

(5) 田口道昭『石川啄木論攷—青年・国家・自然主義』（和

泉書房。平29・1)「第三章「卓上一枝」論」で、氏は「どうにか成る」がメーテルリンクを紹介した上田敏の「マアテルリンク」(『明星』明39・5、6)からの引用と指摘している。が、そうでありつつも、啄木はこの語を、典拠の権威性を誇示する類の言葉としてではなく、逆に凡庸さを際立たせるように用いているように思われる。その点の方が、重要であると思う。

(6) 拙稿「釣人 露伴―安楽」をめぐる政治／文学」(岩波書店「文学 隔月刊」平12・7)。のち『幸田露伴論』(翰林書房。平18・3)に収録。

(7) 木股知史『石川啄木・一九〇九年 増補新訂版』(沖積舎。平23・7)。その「I「ローマ字日記」の世界」(初出は昭56から昭59にかけて)参照。ちなみに、増補された二編のうちの、「啄木の何が新しいのか」(初出は「国文学」平16・12)で氏が示された啄木評価原理の圏内に、本稿の試みはある。

(8) 柳田國男のいう「相手構はずの漢語を使ふ風」の一般化と庶民生活とのあいだの葛藤を巡っては、文学作品からの例として、幸田露伴の小説『望樹記』(大9・10、12)の次の一節が挙げられるだろう。

作者露伴とほぼ等身大の語り手のところに、ひとりの「お婆さん」がやって来て、途中あつた忌々しい出来事を

報告する。普段から彼女は、往来で鼻緒の切れた人を見かけた時の用意に下駄の前つぼを持ち歩いている。今しもその親切を実行し終えた時、「やすい洋杖薄ッ髭」の二人連れの男から「御安直な慈善かうみサネ」と評された、というのである。

「……もう一人が振顧つて見て、『フン』と云つて、『慈善でもないサ、ト言つて義侠といふほどでも無しカ。ハ、ハ、ハ』『ハ、ハ、ハ』と行つてしまひました。かうゐつていふのは何です。」

「おこなひといふことです。しかし失敬な奴ですネ、お年寄りに対して……」

「へエ、年寄で無ければさげすんで貰つても丁度いのですか。」

と余氣猶盛んにお婆さんは其時の忌々しさを吐く。同情せずには居られ無い。

「かうゐ」は行為という漢語を使いこなす軽薄才子と、その語がボキャブラリに入っていなかった「お婆さん」という対比。

(9) 啄木の社会主義への開眼を強調しすぎるこの問題点は、「強権」を国家権力に限定づける傾向を含み持つことであ

る。筆者は、大逆事件に対する啄木の鋭敏な反応もさるることながら、明治四十三年九月九日の夜に詠まれた歌三十九首を重視したい。この時の歌に「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつゝ、秋風を聴く」があるのは周知の通りだが、同時に「何となく頭の中に水盛れる器ある如しぢつとしてゐる」、「何となく顔がさもしき邦人の首府の天空を秋の風吹く」の歌が作られたのは、啄木が、日韓併合を日本国民全体の責任事項として認識していたことを示唆しているだろう。「強権」は、戦うべき外部の「敵」であるばかりではなく、日本人全員がそれを頭に戴いて、積極的に下支えしていたのである。この点について、小川武敏「所謂今度の事」の執筆時期と同時期の短歌について（『国際啄木学会東京支部会報』平7・11。『論集石川啄木』おうふう。平9・10所収）を参照。

〈補〉

本稿の執筆にあたって、山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅱ】』（ちくま新書。令5・2）の「第8講 日本主義と個人主義」（長尾宗典・執筆）を目にしたのが、そのきっかけとなったことを付記しておきたい。そこで長尾氏は、啄木が「青年自体の権利を主張するために登場した『樗牛の個人主義』を高く評価している（石川啄木『時代閉塞の現状・食うべき詩』岩波文

庫、一九七八）」と記しておられるのだが、その根拠を示すはずの（一）内に特定の論文名ではなく文庫本タイトルを挙げる（氏にはめずらしい）杜撰さと共に、樗牛のことを啄木は「高く評価して」いたとする氏の判定に、疑問を感じたのである。氏はまた、その参考文献案内で、「二〇一〇年代を通じて近代文学研究における樗牛再評価が進んで」と述べておられるが、筆者は樗牛再評価においては彼の文学に対する十分に慎重、かつ批判的な検証が必要と考えており、このことも啄木にとつての樗牛の存在意義を考える本稿執筆の動機となった。

〈せきやひろし／本学教授〉